

日本における梁啓超像に関する研究
(要約)

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学籍番号:D186082
氏名:張淑君

本論文は、日本における梁啓超像について考察を加えたものである。全体は、序章、第一部（第一章～第三章）、第二部（第四章～第六章）、終章および資料篇から構成されている。

序章では、まず本研究課題の設定、関連する先行研究、論文の構成および研究の目的について述べた。梁啓超という人物は周知のように、中国伝統学術の十分な素養の元に、西洋の新しい学問の摂取に取り組んだ思想家、学者であり、かつ二十代から政治活動家、ジャーナリスト、閣僚、教育家など、いまの職業的範疇では到底くりきれない広範囲にわたって活躍し、同時代の人々や後の知識人に、多大な影響を与え、ある意味で中国の近代をつくったとさえいえる巨人である。戊戌政変の難を避けて海外に亡命し、一八九八年から一九一二年までの十四年間にわたる亡命生活を基本的に日本で送っていたことを考えれば、彼の一生は日本と深く関わっているといっても過言ではない。梁啓超と日本に関する先行研究では、来日以前及び日本滞在期を中心として、梁啓超の思想の源や明治思想の受容状況に関心が集まっており、来日前後及び帰国以降の梁啓超については、全面的、具体的な分析は行われていない。つまり、梁啓超の日本亡命と放逐の経緯や来日前後の思想の変化、日本での著作の出版などについては更なる検討を行う必要があり、また日中両国の文人や日本の二大新聞（『朝日新聞』『読売新聞』）などがどのように梁啓超を評価していたのかといった問題については、あまり目が向けられてこなかった。しかし、昨今の検索技術の発展により、筆者が改めて調査したところ、従来の研究の中では見落とされていた資料群が存在していることが分かった。そのため、筆者は主に来日前後の梁啓超と日本との関わり、日本における梁啓超像の二つの面に注目し、日本における梁啓超像、ひいては東アジア文明史における梁啓超の位置づけを明らかにした。

第一部では、来日前後の梁啓超と日本との関わりについて考察を加えた。

第一章では、梁啓超が東莞で講学していた時期に著した『読書分月課程』や、『時務報』を主宰していた時期に著した『西学書目表』、来日直後に著した『東籍月旦』といった著作に着目し、彼の西洋学に対する認識、すなわち「西学東漸」思想の構築の過程を考察した。まず『読書分月課程』については、その師康有為の著作『長興学記』『桂学答問』と比較して検討した結果、形式の上では『桂学答問』を踏襲し、内容の面ではその優れた内容を基にして、梁啓超自身の理解を加えて作り上げられており、当時の知識人の中で主流であった、「旧学」を主、「西学」を従とする中体西用に似た認識が窺えた。続いて、『西学書目表』の成書過程や内容を考察した結果、直接欧米諸国を手本として、技術だけではなく政治体制等も積極的に中国に導入するという、当時の梁啓超独自の「西学東漸」に対する認識を窺えた。さらに、『東籍月旦』の成書過程や内容を考察した結果、洋学を直接欧米から中国に紹介するのではなく、日本経由で洋学を勉強し、日本をモデルとして、教育を通じて国民の思想を改造し、中国を救おうとする梁啓超の意図が見えた。以上の考察を通じて、梁啓超の西洋学に対する認識が、彼自身の境遇の変化に伴い、中国の伝統的士大夫の中体西用に始まり、直接ヨーロッパに目を向け、さらには日本へと目を転ずるといふふうに変化していく道筋をたどることが出来た。

第二章では、日本に現存する梁啓超関係公文書を中心として、従来の研究で見落とされていた資料にも着目し、梁啓超の日本亡命や放逐の経緯や原因を考察する。林権助の回想文や大隈重信関係文書の中の梁啓超に関連する文書や、日本公文書館に所蔵されている公文書などを考察していくと、政変後の梁啓超は伊藤博文などの援助の下日本に逃れ、大隈重信らの世話を受けて日本での亡命生活を始めたことが分かった。政治家たちによるこうした支援は、日本の国益・日清両国の友好を損なわないという目算もあって行われたのであり、単に彼らが梁啓超を高く評価し改革者に同情を寄せたことだけが理由で行われたの

ではなかった。さらに、近衛篤磨の回想文や関連文書や劉学詢・慶寛の訪日活動などを考察した結果、西太后を代表とする清国政府の要請や張之洞といった地方実力派の圧力、日本政府の国益優先の政策などによって梁啓超は日本から放逐される可能性があったが、実際は結局放逐されなかったことが分かった。このことは、近衛篤磨・大隈重信・犬養毅などの保護に加え、国際法上の政治犯不引渡原則や梁啓超が日本に滞在しても、日本の国益を損なうわけではないと日本政府側から判断されたことと深く関わっている。

第三章では、初めて日本人により編集され日本で出版された梁啓超の著作『飲氷室文集類編』と『壬寅新民叢報彙編』に着目し、編者や出版社、両書の影響などを検討した結果、以下のことが明らかになった。帝国印刷株式会社は金港堂と深く関わっており、両書の出版および上海商務印書館での販売は一九〇三年に金港堂と商務印書館が合併したことによって実現した可能性がある。また、編者下河辺半五郎は梁啓超本人ではなく、築地小学校などで訓導を担当し、後に金港堂及び帝国印刷で編集者・発行者・記者として働いていたことがある人物である。『飲氷室文集類編』は後の『分類精校飲氷室文集』や『飲氷室全集』や『梁啓超全集』などの編集の際に参考とされる重要なテキストの一つとなった。

第二部では、日本における梁啓超像について考察を加えた。

第四章では、日中両国の近代文人が梁啓超自身や彼の晩年の学術論著に関して残した記録を検討することで、日中両国の近代文人の目から見た梁啓超のイメージを解明する。日中両国における梁啓超と交流がある日中両国の文人や彼自身が子供に宛てた手紙などを検討した結果、梁啓超は学者ないし教育者として、同時代の日中両国において異なった評価を受けていたことが分かった。中国では、晩年の梁啓超は清華学校の四大導師として活躍し、大変注目を浴びた。一方日本では、晩年も依然として新聞記者などとして知られていたが、学者としてはあまり評価されていなかった。ただし、晩年に書かれた『清代学術概論』『中国歴史研究法』といった学術論著については、中国においては高い評価を得られなかったものの、日本においては、桑原鷲蔵や田中萃一郎などの一流の学者や、「言論界の第一人者」と称えられた徳富蘇峰のような有名人から関心が寄せられ、一定の評価を得られた。以上から、梁啓超は新聞記者や政治家、学者などとして、国内外に名を馳せたが、学術の面では、ある特定の分野に専念するより、学問の広さ、新しい学術研究理念・方法の導入などを重視していたため、彼と共に「四大導師」として並び称される王国維、陳寅恪・趙元任の三人が日中両国においてともに高い評価を得ていたのに対して、梁啓超の学者としての評価は、やや複雑な様相を呈していると考えられる。

第五章では、従来の梁啓超研究ではあまり目が向けられていなかった戦前の新聞（『朝日新聞』『読売新聞』）における梁啓超関連記事に着目し、日本の新聞の記事から見られる梁啓超の人物像を究明する。戊戌政変以前、梁啓超は日本の記者から重要視されておらず、二大新聞においては本人に関する報道がなく、改革に関わる活動に参加してから、日本メディアに注目されるようになった。日本滞在期に入ると、主に改革運動の失敗者、亡命の政客と見なされ、改革策は急進的過ぎるといった点で日本の新聞から批判された。民国従政期においては、彼の閣僚としての日本に対する主張や、反袁運動・五四運動に対する反応、言論について大量の記事が報じられ、反日の立場を取っているため日本のメディアから強く批判された。文化活動期においては、彼の教育活動や学術研究についてはあまり関心が寄せられておらず、山東問題に対する見方などは詳しく報道されていることから、彼の文化活動よりも政治主張のほうに重視されたことが分かる。以上から、日本メディアにとっては、梁啓超は新聞記者でもなく、学者でもなく、思想家でもなく、あくまでも政治家（多くの場合は反日の立場を取っている）であったことが分かる。

第六章では、『清代学術概論』を紐帯とし、橋川時雄と梁啓超との交際を代表として、

『清代學術概論』の日本語の訳本、特にこの度その所在が確認できた橋川時雄による訳本に考察を加えることによって、梁啓超と当時の日本の学者との学术交流の実態を明らかにし、ひいては一九二〇年代の日中学術交流の風景を再現した。この度筆者が確認したところ、一九二〇年代には訳者の異なる日本語の訳本が二種類、一九七〇年代には訳注本が二種類出版され、従来の研究では所在不明とされていた橋川時雄による訳本の所在も明らかになった。当時の『清代學術概論』の日本語訳本の出版や関連する書評の発表などからみると、彼は日本の文化人から大変注目されており、他方、ある程度当時の日本人が中国の政治、社会、学術、国民性などに対して理解を深めることに役に立つのではないかと考える。

終章では、各章の内容をまとめ、梁啓超と日本との関わりや日本における梁啓超のイメージを研究することによって、彼の東アジア文明史上における位置づけをよりいっそう明らかにした。さらに、梁啓超に限らず、彼のような時代の変わり目において活躍した知識人たちの歴史上における位置づけや影響を検討する際、中国本土の資料だけでなく、海外の資料をも視野に入れて、より広い視点から研究を行う必要があることを指摘した。

資料篇では、明治期から戦前までの『朝日新聞』と『読売新聞』における梁啓超関連の記事を収集して整理することで、梁啓超研究における該当分野の空白を埋める。